

佐藤満教授を送る

立命館大学政策科学部教授 重 森 臣 広

佐藤満先生が2019年度をもってえ定年退職される。先生は、1978年に京都大学法学部をご卒業になり、京都大学大学院法学研究科を経て、1983年に京都大学法学部助手に就任したのち、1986年には福井大学教育学部に助教授として赴任された。本学での教員生活は1989年に法学部助教授として迎えられたときに始まり、30年にわたって本学の研究教育に貢献していただいたことになる。

言うまでもなく、先生は1994年の本学政策科学部開設時のメンバーでもある。先生は『立命館百年史紀要』第17号に「政策科学部創設のころ」という一文を寄せておられるが、そこに詳しく記載されている通り、本学が新しい文系新学部の設置を構想し、設置準備委員会、設置委員会のメンバーとして、この構想がやがて政策科学部として結実するまでの過程を担われた方でもある。いわば政策科学部の「生みの親」である。1991年に大学設置基準が大綱化され、日本の大学のあり方、大学教育の方向性について見直しが迫られる中での新学部設置である。国公立を問わず、こうした大きな文教政策の転換を前にして、右往左往する大学が多かった。欧米へのキャッチアップの終焉が巷間、議論されてはいたが、脱キャッチアップ型の高等教育の具体像を結べないままでいた中で、(先生の言葉を拝借すると)ボトムアップ型の実践的な社会的リーダーの育成、すでに押し寄せていた情報化に応答できる教育課程の編成、海外を含むオフキャンパスにおける学びの機会提供など、こんにちの大学改革の課題をすでに先取りした構想をもっていたことがよくわかる。政策科学部創設にいたるこうした熱気に満ちたプロセスを経験した方が、佐藤先生のご退職によっていなくなってしまうことは本当に残念である。

先生のご専門は政治学、わけでも政治過程分析の理論研究であるが、その視野と裾野は広い。政治過程研究と政策研究の融合をめざした研究業績群があり、これも理論モデルの分析と提示から事例研究にその範囲が及んでいる。先生が抽象的な理論と具体的な事実を縦横無尽に往来できるのは、福井県、石川県、富山県、京都市、神戸市の県史・市史の編纂と執筆の豊かな経験をおもちだからではないかと思う。また、論文・著書ではなく業績表では「その他」事項に記載されてはいる「GHQ/SCAP 文書データベース」の構築は、多くの分野の多くの研究者に知的インフラを提供したという意味で特筆すべきものがある。

理論的な営みはものごとの全体の輪郭を掴むということである。しかし、輪郭だけ掴んでもものごとの細部が不正確であれば、その輪郭は無意味である。場をわきまえずに勝手な憶測を

書かせていただきたい。先生の広く深い視野は、もしかすると本学における先生のもう一つの顔にも関係するのではないか。政策科学部開設の準備のみならず、開学以降も先生は新生政策科学部の運営をリードされてきた。学生補導、企画、教務管理に関わる役職はすべて経験されている。それだけでなく、学校法人立命館の常務理事として法人全体の教学分野を担当し、長く大学協議会の委員として巨大な組織である立命館の意思決定に携わり、その過程を観察されてきた。独特な視野をもつがゆえに、これだけの役職を担うことができたのかもしれないし、そうした経験が先生の視野をいっそう広げ深めたのかもしれない。

先生がマキアヴェッリの『君主論』に登場するヴィルトゥの概念に言及されていたのを思い出す。英語ではヴァーチャ、美德、力量など多義的な言葉だが、先生によるとその適訳は「根性」だそうだ。マキアヴェッリがヴィルトゥをフォルトゥナ（運命）との対で登場させた概念であることを想起すると、たしかにそれが適訳かもしれない。フォルトゥナに翻弄されるに甘んじるのではない、近代人の意志を表現したのがヴィルトゥだからである。政策科学部も25年目を迎えた。人間でいえば25歳。立命館大学も政策科学部も、これからいくつもの困難に遭遇することだろう。佐藤先生が退職されたあと、政策科学部を引き継ぐ私たちは、先生のヴィルトゥの思想をしっかりと受け継いでいかねばならない。

最後に改めて、政策科学部教職員・学生を代表して、これまでの先生のご業績をたたえ、またご苦勞をねぎらい、政策科学部の誕生から成長にわたってご尽力をいただいたことに、深く感謝の意を表したい。